『別科日本語教育』第５号（2003）

中国語を母語とする日本語学習者の作文分析

－ 初級後半から中級学習者を中心に －

小林　美和子

【キーワード】　中国語母語の日本語学習者、英語母語の日本語学習者、作文分析

１．はじめに

本稿は、大東文化大学の『別科論集』第２号小林17－27（2000）の続篇として書いたものである。

前回は、英語を母語とする日本語学習者で初級後半から中級程度の５名の作文を比較検討した。今回は、大東文化大学、別科日本語研修課程、Ⅱクラス15名の１年間の作文の中から５名を取りあげ、前回と同じ程度の数の10作文を資料として、それらの誤用例を分析した。今回の作文はすべて、中国語を母語とする日本語学習者の書いたものである。また、文体に関しても、敬体形と常体形、その混合文が授業を重ねるにつれてどのように変化したかを考察してみた。今回は段落の数やその段落に不整合がないか、内容の不統一がないかにも注目した。まとめとして英語母語の日本語学習者の誤用と中国語母語の日本語学習者の誤用を比較できればと思っている。

２．調査・分析

２－１　調査資料

対象は、前述した中国語を母語とする別科の学生15名から出欠席を考慮し、１回も欠けることなく作文の各トピックを提出しているものの中から、初級後半の実力があると思われる５名をぬき出した。

テキストは、専門教育出版の『絵入り日本語作文入門』を前期に使い、その後専門教育出版の『日本語作文Ⅰ』、『日本語作文Ⅱ』を用いた。自己紹介文を書かせた後に、自分の一日の行動をテーマにして初回の作文とした。全部で22作文中、期間をできるだけ均等にして、10作文のトピックを対象にした。

授業方法は前期に『絵入り日本語作文』の文型を練習しながら、各トピックでそれを使えるようにし、トピックに関連した語句、トピックを考えさせるようなインタビューを各学生にしてから作文を書かせた。

後期は、『日本語作文Ⅰ』のテキストから学生の希望が多いトピックを選び、テキストに沿って授業を行い、各学生にトピックについての意見を出させ、まとめさせ、それを作文に書かせた。文型練習、インタビュー、作文を１時間半で行い、自宅で書いたものは資

料からはずした。

最後の作文は、『日本語作文Ⅱ』のトピック「４．科学の進歩と人間」について書いた。これは図書館等で参考文献を調べ、考えを発表させる形式をとったので、準備、作文作成、推稿、清書を含め３時間程かかった。

また、全ての作文は、添削をして誤用をチェックし、講評を加えて、作文を書いている間に各学生に口頭で誤用の指摘をして、正しく訂正しながら返却した。トピックによっては授業の最初に自分の作文を口頭発表させた。

対象の５名の学生の成績差を順につけないでランダムにＡ～Ｅとした。各学生の中において、１人の学生に同じ誤用の集中がみられたが、大きな能力差はなかった。全員、初級後半から、最後の作文を書く頃には中級レベルに達していたものと思う。Ａの学生の１回めのトピックの作文はＡ1 とし、最後の作文をＡ10とした。他のＢ～Ｅも同様に表記した。

２－２　分析方法

今回は、誤用の範囲をⅠ表記上、Ⅱ文法上、Ⅲ文及び文章の構成（段落を含む）上、Ⅳ文体上の４点から分析した。そして、文の構成と文体に関わる文の種類を、０として最初に表示した。

文の種類では、単文と重文と複文と文の総合点を調べてみた。複文構造と重文構造については、浅井（2002）52に「初級後半の学習者では使うことができる文型が少ないため単文が多くなるのは当然であり、現実に文章を書くことが求められる上級学習者の構造はこの結果とは異なっていると思われる。」と書いてあり、また「作文を見ていく場合に単文、複文接続節が作文中にどのような割合で含まれるかという観点を導入して、複文の多さと作文のまとまりの関係を考えることは意義がある。」と述べられていたので、資料の作文全ての総文字数と総文数、単文、重文、複文の数を調べて、前回の作文に項目を追加した。

表記上の誤りでは、ａ漢字（送り仮名の誤用も含む）、ｂ語彙（意味の誤用も含む）の表記上の誤り、ｃカタカナ表記、ｄ拗音、ｅ撥音、ｆ促音の表記上の誤り、ｇ濁音、ｈその他の表記上の誤りに分けた。

文法上の誤りでは、ａ助詞の誤用は総数をあげ、その中の助詞の脱落の数を（　）の中に示した。ｂ副詞、ｃ接続詞、ｄ動詞、ｅイ形容詞、ｆナ形容詞、ｇ助動詞、ｈ名詞、ｉその他では語形、態の誤用も含めた。

文及び文章の誤用では、ａ－文における文の前半と後半の形式及び内容矛盾（よじれた文）、ｂ－文全体の内容が意味不明であったり、不統一であるものを調べた。ｃでは段落数を、ｃ´では形式段落が正しく作られているか、段落としての不整合がないかを調査した。ｄでは、全体の文章構成の、倫理が一貫してまとまっているか否かと、そのトピックに対して妥当な文章内容、構成になっているかを考察した。

文体については、敬体形と常体形の説明を授業の初期の頃に１回と、後記に入る前に１回行った。文章体と会話体との違いも説明した。添削の段階で敬体形と常体形の混合、あるいは、会話体の混入などに注意した。

作文は全部で22トピックあったが、前回の論文と比較しやすくする為10作文をぬき出してテキストとした。そのトピック項目と作文を書いた時期は以下の通りである。

A 1～E 1　私の一日　（5／10）
A 2～E 2　私の国　（5／17）
A 3～E 3　私の目的　（5／31）
A 4～E 4　食べ物　（6／14）
A 5～E 5　電話　（7／10）
A 6～E 6　買い物　（10／11）
A 7～E 7　電車又は他の交通手段　（11／1）
A 8～E 8　友達　（11／22）
A 9～E 9　都市と田舎　（11／29）
A10～E10　科学の進歩と人間　（1／17）

2－3資料の分析

誤用例を分析すると以下のようになった。

表1　初回の作文の誤用と文の種類と文体

0．文の種類	A 1	B 1	C 1	D 1	E 1
単　文	18	16	17	21	19
重　文	0	0	0	0	0
複　文	0	0	0	0	0
文の総合計	18	16	17	21	19
総文字数	288	248	301	239	335
Ⅰ．表記　a漢　字	1	0	0	0	0
b語　彙	0	0	0	0	0
cカタカナ	0	1	0	2	1
d拗　音	0	0	0	0	0
e撥　音	0	0	0	0	0
f促　音	0	0	0	0	0
g濁　音	0	0	0	0	1
hその他	0	0	0	0	0
Ⅱ．文法　a助　詞	0	5（うち脱落3）	1	0	2
b副　詞	0	0	0	0	1
c接続詞	0	0	0	2	0
d動　詞	0	1	0	2	0
eイ形容詞	0	0	0	0	0
fナ形容詞	0	0	0	0	0
g助動詞	0	0	0	0	0
h名　詞	1	1	2	1	0
iその他	0	0	0	0	0
Ⅲ．文・文章a前後の矛盾	9（よじれた文）	0	0	0	1
b段落数	1	1	2	8	4
c段落の不整合	0	0	0	1	0
d文章構成内容の不統一	0	1	0	0	1
Ⅳ．文体　a敬体形	18	16	17	21	19
（文の数）b常体形	0	0	0	0	0
c敬体形常体形混合文	0	0	0	0	0

表２　最後の作文の誤用と文の種類と文体

0．文の種類	A10	B10	C10	D10	E10
単　文	3	7	12	12	7
重　文	0	2	1	0	0
複　文	12	16	23	13	22
文の総合計	15	25	36	25	29
総文字数	777	866	975	832	923
Ⅰ．表記　a漢　字	1	3	0	0	4
b語　彙	0	2	2	2	2
cカタカナ	0	0	0	5	0
d拗　音	0	0	0	0	0
e撥　音	0	0	2	0	0
f促　音	0	0	0	2	0
g濁　音	0	1	3	8	0
hその他	0	2	0	2	7
Ⅱ．文法　a助　詞	1	2（うち脱落2）	3（うち脱落3）	7	5（うち脱落1）
b副　詞	0	0	1	0	0
c接続詞	0	0	0	1	0
d動　詞	0	1	4	5	1
eイ形容詞	0	0	0	1	1
fナ形容詞	0	0	0	0	0
g助動詞	0	0	1	3	1
h名　詞	0	4	2	1	1
iその他	0	1	0	0	0
Ⅲ．文・文章a前後の矛盾	（よじれた文）0	0	3	1	1
b段落数	2	4	10	2	4
c段落の不整合	0	0	2	1	0
d文章構成内容の不統一	0	0	1	3	0
Ⅳ．文体　a敬体形	0	0	14	25	0
（文の数）b常体形	15	25	18	0	29
c敬体形、常体形混合文	0	0	4	0	0

表 3　全体の作文の誤用と文の種類と文体

0．文の種類	A 1～10	B 1～10	C 1～10	D 1～10	E 1～10
単　文	146	117	181	119	149
重　文	10	12	6	11	14
複　文	76	77	63	60	82
文の総合計	232	206	250	190	245
総文字数	5535	4942	5114	4592	5264
Ⅰ．表記　a漢　字	5	1	10	12	14
b語　彙	0	0	6	0	0
cカタカナ	2	3	6	13	4
d拗　音	0	0	0	0	0
e撥　音	2	2	3	1	0
f促　音	2	2	0	0	0
g濁　音	0	9	19	25	12
hその他	9	14	3	11	16
Ⅱ．文法　a助　詞	19 (うち脱落11)	76 (脱落16)	52 (脱落9)	80 (脱落19)	51 (脱落15)
b副　詞	1	2	2	2	2
c接続詞	0	4	7	5	1
d動　詞	0	17	20	26	11
eイ形容詞	2	3	3	5	8
fナ形容詞	1	2	3	0	6
g助動詞	0	2	2	4	5
h名　詞	3	17	18	18	11
iその他	3	12	6	1	9
Ⅲ．文・文章a前後の矛盾	(よじれた文) 3	14	16	13	10
b段落数	28	38	44	43	42
c段落の不整合	1	1	4	1	1
d 文章構成 内容の不統一	1	10	1	0	1
Ⅳ．文体　a敬体形	6	6	8	8	8
(文の数) b常体形	1	1	0	0	1
c 敬体形、 常体形混合文	3	3	2	2	1
d 会話体の入っている文 「　」の記号なしで	4 文	3 文	0	4 文	2 文

２－４　分析結果

表１～３を考察してみたい。今回は前述したようにＡ～Ｅの作文の評価の順位づけをしないで分析した。学習者の日本語学習歴は、長くても１年、短い者で数か月、別科ではレベル別のⅢクラス中のⅡクラスで、この年の別科の日本語学習者全体のレベルは高かったので、Ⅲクラスは上級に近い者もおり、Ⅱクラスは、初級後半から中級ぐらいのレベルである。全て中国語圏からの留学生で、中国の日本語学校で学んだか、あるいは独学で学んだ者もいた。15名中の５名をぬき出して、前回の英語を母語とする日本語学習者と比較しやすいようにした。

表１では、初回の作文として、「私の一日」というトピックで、レポート用紙形式のものに横書きで書いた。段落の作り方は事前に説明したが、段落数が極端に多い者と少ない者がいた。Ｄの日本語学習者は、239文字、21文中に８段落もの形式段落を作った。最初の段階では、形式段落の意味を十分理解していなかったと思われる。反対に、段落を作らなかった者が２名いた。表１では、文字数288字と248字もあるのに、ＡとＢの学習者は、１段落しか作らなかった。ＡとＢの学習者は、表２の最後の作文になると、Ａは777文字に２段落、とやはり少ないが、Ｂは866文字で４段落に改善され、内容の区切りも妥当であると思われた。

表２の最後の作文では、学習者Ｄではなく、学習者Ｃの段落数が多かった。総文字数ともに増えており、引用文もあり、文も複雑になって、段落を意識して細かく作ったものと考えられる。

誤用数から考えると、表１の初回の作文では一見どの学習者も誤用が少ないように見えるが、全体的にどれも総文字数、総文数が少なく、既習の文型を用いており、全て短い単文で作っている為、結果的に誤用が少なくなった。これらに、誤りの少ない短い文を書こうとする学生の意図が感じられる。また、最初の作文では、日本語の技術的な面でも複雑な文は書けない段階である。

同様なことが助詞の誤用数にも表われている。表１では助詞の誤用が極めて少ない。誤用をしなかった学習者もいる。しかし、これは助詞の運用が全部正しく行われていたことを示すものではなく、先にあげた理由、単文で文型の決まったものが多かったので、助詞の誤用も少なかったのである。これに対して表２の最後の作文では、学部の授業レポートの準備ともなる小論文を目標としたトピックなので、学術書等からの引用も多く、自分の意見も述べている為、複文の数が多くなり、総文字数、総文数ともに増えているので、助詞の誤用が多くなったように見える。学習者Ｂは逆に、助詞の誤用が減っており、この学習者は、全体の作文を順次書く途中で、助詞の誤用を５名中、２番めに多く指摘されている。授業中に教師と自分の作文の誤用を、フィードバックした時に、気をつけて直していって、同じ誤りをしないようにした可能性がある。

３．学習者について

次に、各学習者ごとに目立った誤用例と、問題点をあげてみたい。学習者Ａは、Ⅰ表記とⅡ文法上の誤用を合計したものは49で５名の学習者中一番誤用が少なかった。一文の長さも他に比べて長く、日本語の作文能力も相対的に優れていた。表記上のその他の誤りで

は、単純な句点と句読点のつけ方に誤りがあった。また、文法上で文末表現にテンスやアスペクトの誤りが見られた。

学習者Bは、表記、文法上の誤用総数が166で、目立った誤用は助詞の使い方の誤りと脱落だった。表記上のその他の誤用は、やはり句点、句読点、「　」などの記号の脱落があった。文法上の誤りは、発音と表記が一致しないための名詞の表記の誤用であったがⅡのその他に入れた。主述の合わないよじれた文も非常に多かった。接続語の使い方が間違っていたために、文の前後の関係がこわれているものもあった。最後の作文では、調べた本の引用文と自分の意見との間に混乱が生じ、内容の統一性が失われてしまった。

学習者Cは、総誤用数（Ⅰ・Ⅱの中で）が150で、漢字の誤用では、母語である中国語の漢字が入ってしまい、辞書をひいたり、教師に確認するようにしたが、この誤用は減らなかった。その他句点と句読点の表記ミス、文法上では他動詞と自動詞に用法の誤りが多かった。Ⅱのその他では、過去形とすべきところを現在形にする、あるいはその逆もあった。段落は内容的に妥当でないものもあった。

学習者Dは、表記、文法上の総誤用数が202で最も多かった。中国語母語話者の苦手とする濁音表記の誤用も最多で、漢字表記、カタカナ表記の誤用も多かった。動詞と名詞の誤用が多く、難しい文に挑戦しようとするほど、正しくない文末の省略があり、一文の前半と後半で内容に矛盾のあるよじれた文がみられた。表記上の誤用では、その他の項目に、ひらがな表記の誤りがあった。また「　」の脱落と句点、句読点の脱落もあった。文法上のその他の誤用では、テ形の誤り、指示語、過去形と現在形のテンスの混乱などもあった。

学習者Eは、総誤用数が150で、中国語の漢字の混入の誤りはみられたが、その他の表記上の誤りは、句点と句読点の脱落と、濁音の表記ミスぐらいしかなかった。文法上では、イ形容詞とナ形容詞の使い方の誤用と名詞、動詞の誤用が目立った。その他、日本語の表現技術が向上した時に、敬語を使うようになり、その誤用がみられた。過去と現在の混乱も２回程あった。

最後に、文体について簡単に分析してみたい。初回の作文では５名全員の作文全部が敬体形の文で統一されていた。既習の文型通りの文体である。それらの文は複文が一例もなく、単文だけだった。

最後の作文では、事前に常体形の書き方を説明したので、５名中４名が常体形を使っている。

学習者Dだけは、いつも使っていた敬体形のみを用いていた。学習者Cは、敬体形と常体形の統一を修得するまでにはいかなかった。５名中３名は完全に常体形に統一することができた。最後の作文までにいく過程では、どの学習者にも敬体形と常体形の混合文がみられた。「　」の記号なしで、引用の「と」がみられない会話体の入ったものも、Cの学習者を除いて全員にあった。

４．まとめ

まとめとして、前回の論文小林（2000）の英語母語学習者と、今回の中国語母語学習者の比較をしてみたい。前回の調査では、対象学習者は５名ずつで、対象作文は平均して約10作文をテキスト資料として選んだ。総文字数は4592～5535と学習者間で大きな差はなかっ

た。

表記上では、英語母語話者に比べて、漢字の誤用も少なく、漢字の語彙数も豊富であるが、送り仮名、用法の誤用、中国の漢字と日本の漢字の混同等が特徴としてみられた。カタカナ表記ミスは、英語母語学習者と同じくらいみられた。どちらの場合も、音と表記をきちんと対応させなければならないと思った。濁音は、前回の論文で、その他の項目に入れるほど目立たなかったが、中国語母語話者の作文では、誤用が大変目立った。これらの学習者にも、この点に注目して、誤用をした本人に気づかせなければ、この誤用は減らないだろう。

文法上では、英語母語学習者、中国語母語学習者ともに助詞の誤用が非常に多かった。その中でも、中国語母語学習者は英語母語学習者より助詞の脱落が多く見られた。また名詞の使い方でも、英語母語学習者より、中国語母語学習者の方に誤用が多かった。これは中国語から推測される名詞の造語を学習者が作ってしまい、結果的に誤用につながっていると思われるので、自分の中での語彙を正しく整理させて、作文に運用できるようにすべきだと思う。

以上、英語母語日本語学習者の作文と、中国語母語日本語学習者の作文の誤用の比較を検討したが、反省として文の構成やトピック、内容レベルの比較ができなかったということがある。また、前回は評価の点に言及できたが、今回は分析に時間がかかり、評価まで至らなかった。今後は東保（2001）のように、フィードバックを考慮した作文評価を考え、学習者に誤用を自己訂正させる方法等も試みて、日本語学習者の一層の作文能力向上と評価方法を今後の課題としたい。

参考文献

浅井美恵子（2002）「日本語作文における文の構造の分析－日本語母語話者と中国語母語の上級日本語学習者の作文比較－」『日本語教育』115号PP51－60日本語教育学会

久保るみ（2001）「初中級のアカデミックな目的のための作文－学習者へのフィードバック及び評価方法を探る－」『大阪大学留学生センター研究論集・多文化社会と留学生交流』第5号PP73－86

小林美和子（2000）「日本語作文の誤用と文体について－初級後半と中級学習者を中心に－」『別科論集』第2号PP17－27大東文化大学

佐治圭三（1996）『外国人が間違えやすい　日本語の表現の研究』ひつじ書房

東保登紀代（2001）「フィードバックを重視した作文教育－誤用の自己訂正と作文分析シートの記入－」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第5号PP127－142

森田良行（1985）『誤用文の分析と研究－日本語学への提言』明治書院